

## コンゴ伝道に見る異文化接触 (46)

(前号からの続き)

銃声が間近で聞こえる中、バゼビバカ氏はようやくキンプロモにたどり着いた(1998年12月19日)が、そこも危険になり闇夜の中を幼い子どもを連れて、さらに西に向かっていかなければならなかった。彼の手記を辿っていく。

「(西に向かって) 17キロほど歩いたところ、ある学校の教室で夜を明かしました。大勢の人々の列が続き、マットレスや鞆を抱えた者、スーツケースを頭に乘せた者、体の不自由な者や老人を背に負い、あるいは一輪車に乗せた者など、悲惨な光景でした。私の母、姉妹、甥姪たちは国道1号線を辿って歩いて行きました。我々の家財は略奪者のために残したようなものでした。」

国道1号線は、ブラザビルから500キロ離れた第2の都市ボワント・ノワールに通じる道で、森林資源が豊富な地域を貫通しており、国の経済にとって重要な幹線道路である。独立以降、60年や70年代まではまだ道が整備されていて、日本人布教師の中には、500キロの道を車で走破した人たちもいたが、整備が滞り次第に悪路となっていった。80年代には、舗装道路には至る所に穴ができ、アスファルトが大きく削られ、雨季には水たまりがあちこちにでき、四輪駆動や大型トラックでしか往来できない道となっていた。村を通過するところは比較的開けているが、森の中を通るところでは大木や草木が生い茂っている。多くの避難者とともに進んでいるとはいえ、どこまで進めば安全なのか分からない中での避難は、いつもより距離が長く感じられたことであろう。

「21日、さらに30キロほど歩いてリンゾロに着きました。そこからさらに3キロほど歩いてトゥラに着きました。蚊と寒さと戦いながら夜空の下で夜を明かしました。雨が降れば、止むまで眠れません。食べ物は、朝食にマンゴーを、マニオクの根茎と味のないサカサカ(マニオクの葉)、そしてサフー(南洋の木の实)が夕食です。」

多くの人たちが着のみ着のままで逃げしており、食料が大きな問題だった。もちろん、難民を収容する施設もなく、食べられるものは何でも食べたという。「塩気すらないものを食べるのが辛かった」と、森での生活を述懐する話の中でよく聞かれた。また森の中では、蚊の攻撃をもらいながら夜を明かさなければならぬ。栄養が足りない中、夜になると寒くなる。ほとんどの人がマラリアを経験したことがあるコンゴでは、体の抵抗力がなくなるとマラリアを発症する可能性が高くなる。実際、森の生活の中でマラリアにかかり、薬もなく十分な治療ができずに命を落とした人も少なくない。その中には、教会の関係者もいた。苦しい生活の中で、戦闘は断続的に続く。次なる行動が検討され、それまで一緒に行動した教会関係者は、それぞれに別々の選択をすることになっていく。

「1週間後、フラビヤン夫婦は我々と別れてンバム(前会長夫人の郷里)に向かいました。しかし私は子供や家内に長距離を歩かせることはできず、私たちは残りました。ラジオを聴いて、(首都に戻るための)人道的な通路はあるものの、30日にそこを通ろうとした者はニンジャによつ

て、『盾』として人質にされたことを知りました。我々は他の人たちと計画を練りました。それは、夜間戦闘が静まるのを待ってニンジャの目をかすめ、気付かれぬよう抜け出すという危険な脱出計画でした。」

こうして、これ以上の森での避難生活はできないと判断したバゼビバカ氏は、妻と幼い子どもを連れて、首都に引き返すことを決意する。戦場と化した布教所や教会の付近がどのような状態になっているか分からない中で、それは命をかけた決断でもあった。

「1999年1月1日午前1時、トゥラを発ちました。100名ほどが、列になり、黙って、森の中の細道を歩きました。間違えば、敵とも見られ、命を危険にさらす行動でした。午前3時、暗闇の中でアンゴラ兵と出くわすのを避けるため、またニンジャの目の届かぬところで休みました。朝6時、再び歩き始め、前線近くのマディブに着いたとき、アンゴラ兵、チャド兵に止められてしまいました。2時間以上、脅迫、身体検査、荷物検査を受けました。『おまえたちはニンジャか? 男は皆死んでもらう。』プール地方のもっと遠くへ逃げて行くべきだったと、この道を選んで歩いてきたことを悔やみました。武器の跡形が残っていないかと手や肩を調べられました。アンゴラ兵相手には言葉は通じず、女、子供は泣き出しました。」

避難した人たちの中には、このような状況の中で、無抵抗の人が兵士によって問答無用で銃殺された場面に遭遇した人もいた。言葉が通じない中、必死のいいわけもむなしく、叫ぶ者を黙らせるためか、またそれを見せしめにするためなのか、多くの人の前で銃殺が行われたようだ。こうした話は避難生活の中で広がっていたことだろう。「男は皆死んでもらう」、この言葉にバゼビバカ氏は「死」を覚悟したという。

「結局、これもニンジャを誘い出すための脅迫だと、フランス語のできるチャド兵が説明してくれました。こうして、2つ目の関門を越えました。3つ目はジュエ橋を守る民兵のコブラです。幸い、チャド兵が軍司令部に連絡を入れてくれていました。4時間ほど待って、司令官が現れました。兵士に護衛されて、男性グループと女性グループとに分かれ市内に向かって歩き出しました。私は息子を肩車したり、歩かせたりして、無事にブラザビル北部にたどり着きました。女性はニンジャと見なされることはなく、自由に歩けました。妻は長女と一緒に歩きました。マディブから軍隊大通りにかけては、信じられない光景が広がっていました。死体が累々と散乱し、腐乱したものは犬や鳥の餌になっていました。堪えられぬ悪臭、破壊、焼き討ちされた家々…、口では表現できません。私の息子はきっとこの光景を長く記憶に留めることでしょう。」

こうして、命をかけてブラザビル市内に戻ってくることはできたが、その道中では、身体検査だけでなく、罵倒や脅迫、そして持ち物の巻き上げ(時計、金銭、衣服など)が、公然と行われていた。いつ、どこで、誰によって殺害されても仕方がない状況で、彼らはただただ命を守るため、言葉も発することもできず、言われるがまま指示に従うしかなかった。(続く)